

第12回世界精神医学会横浜大会

シンポジウム

母子精神保健における周産期・乳幼児精神医学

自閉症児・養育者間における動因的葛藤，愛着
（「甘え」），情動のコミュニケーション

小林 隆児，小林 広美，船場 久仁美，仲間 友子，山本 奈津子，財部 盛久

精神神経学雑誌第105巻第9号別刷

平成15年9月25日発行

PSYCHIATRIA ET NEUROLOGIA JAPONICA

Annus 105, Numerus 9, 2003

第12回世界精神医学会横浜大会

シンポジウム

自閉症児・養育者間における動因的葛藤，愛着
（「甘え」），情動コミュニケーション

小林 隆児（東海大学健康科学部社会福祉学科），小林 広美（茅ヶ崎リハビリテーション専門学校），船場 久仁美（世田谷ボランティア協会），仲間 友子，山本 奈津子（東海大学大学院健康科学研究科），財部 盛久（琉球大学教育学部）

I. はじめに

筆者らは，自閉症を関係障害とみなす立場から，現在試みている幼児期の早期介入とその後の経過を報告する。今回の経過報告をまとめるにあたり，焦点を当てたのは，自閉症の言語認知発達の問題を関係障害臨床の立場からどう考えるかという点であった。

われわれは，自閉症にみられる特異的な言語認知障害をもたらす要因として，コミュニケーションの問題，とりわけ情動コミュニケーションの成立が困難であることを重視している。情動コミュニケーションは，母子間の愛着関係が深まっていくことによって初めて成立する。われわれが情動コミュニケーションに力点を置くことの重要性を認識したのは，われわれ日本人が「甘え」という対人関係における独特な情緒性に敏感な国民性を有していることと深く関連している。

自閉症児の場合，養育者とのあいだで愛着関係が容易には成立しないのが特徴である。その原因を，われわれは，Richer²⁾が提起した接近・回避動因的葛藤 approach-avoidance motivational conflict による母子関係の悪循環によると推定している。自閉症児はその知覚過敏に基づくあまりに強い不安によって，養育者に対して容易に愛着行動をとることができず，悪循環によって両者間に関係障害 relationship disturbances がもたらされる。

われわれは自閉症児に対する早期介入を，関係障害臨床の視点に立って，この接近・回避動因的葛藤の悪循環をいかにして断ち切って葛藤を緩和していくかに焦点を当てている¹⁾。

われわれの臨床の実際は，Mother-Infant Unit (MIU) と称された母子治療室とそれに隣接した観察室におけるビデオ録画装置に大きく依拠している。治療経過が録画されたビデオテープを振り返ることによって，初めて気づくコミュニケーションの重要な場面は少なくないが，それはコミュニケーションの中でもとりわけ情動コミュニケーションが意識の介在しない，あるいは部分的にしか意識化することのできないコミュニケーションであることに依っている。

まず具体的な事例を呈示する。

事例は，治療開始時，1歳8ヵ月のA男である。

まだ発語はなく，歩くことができない。精神運動発達遅滞をともなった中等度の発達の遅れをもつ自閉症児である。彼はMIUで床にころがっているたくさんのボールを手で扱い，ボールが動く様を見つめながら追いかけることに夢中である。周囲の大人の存在にはまったくといっていいほど関心を示さない。動きが止まった時に母親が頬ずりしようとする近寄ると，顔を背けて母親に背中を向けてしまい，ふたたびボールに夢中になって動き

回っている。

II. 接近・回避動因的葛藤

1. 愛着をめぐる葛藤

自閉症を初めとする非常に過敏で不安の強い子どもは、強い欲求不満、恐れ、不安感を抱きやすい傾向をもち、回避欲求が非常に強いために、接近行動を起こしても、いざ親から抱きかかえられそうになると回避行動が誘発され、さらに回避行動を起こして親から放置されると接近行動が誘発されるという悪循環を繰り返す。そのため両者間に愛着関係が容易には成立しない。このような特徴を持つために、愛着形成が困難となる。養育者に対する愛着をめぐる葛藤で、接近・回避動因的葛藤といわれている。A男の行動特徴にこの種の葛藤の特徴がよく示されている。

2. 異常な知覚過敏

接近・回避動因的葛藤が起こる原因は、子どもにもともと備わった異常なほどに強い知覚過敏に基づいていると考えられる。このような傾向をもつ子どもは非常に育てにくく、養育困難な気質をもっている。あまりに強い知覚過敏のために、抱いても身体をのけぞる、寝てもすぐに目を覚ます、新しい物を口にしない、相手をしようとしてもすぐに逃げてしまうなどの特徴を示すことが多い。時には働きかけても反応が乏しく、とても大人しい印象を与えることもある。

自閉症児の知覚面の特徴は、知覚過敏のみならず、外界、対象への独特な知覚行動として認めることができる。具体的には、対象を眩しそうに目を細めて眺める、周辺視野を用いた注視や追視運動、対象の一部の微細な部分を見入る、刺激に対する耳塞ぎ行動などである。

III. 対象世界と認知(認識)のあり方

1. 認知の働きと言語機能

われわれは自分の周囲の世界をみんな同じように捉えているように思いがちである。実は、だれひとりとしてまったく同じように捉えているということはありえない。世界をどのように捉えるか、

それは認知あるいは認識という心の働きで、ここでは言語が大きな働きを担っている。言語を媒介として初めて、人は自分でどのように世界を認知しているかが分かる。しかし、われわれが同じ言語表現をしているからといって対象をまったく同じように捉えているかといえば、決してそうではない。ことばでは表現できない微妙な感じ方の相違などが、その人独特な対象世界を形作っている。

2. 対象の持つ意味は文脈に規定される

身の回りの世界を見渡してみただけでも痛感することであるが、われわれの周りには無数とも思えるほどの対象が存在し、時の流れの中で様々な事象が不断に生起している。さらにひとつの対象は、決してある特定の意味だけを担っているのではない。一枚の「紙」が、何かを書きたい時には「メモ用紙」に、使わずに捨てられれば「紙くず」に、折って遊びたい時には「折り紙」へと、状況によって、当事者がその対象とどのように関わるかによって、対象の持つ意味は変わる。対象の持つ意味はその文脈によって規定されているといわねばならない。

3. 対象と属性

また、ある対象には多様な属性が備わっている。対象のもつ意味が規定されるのは、多様な属性の中のどれにどのように着目するかによって大きく異なる。

IV. 自閉症児の知覚世界

1. 知覚刺激が無秩序に飛び込む

自閉症児にみられる異常に強い知覚過敏が、対人関係を持つ上で非常に大きな妨げとなっているが、対象を知覚する際にも、知覚過敏によってわれわれには想像もつかないような世界を体験していることが分かってきた。よく知られているドナ・ウィリアムズの自伝には、対象のもつ多様な知覚刺激の多くが彼女の感覚器官に飛び込むために、圧倒されるような体験をしていることが述べられている。このことは、対象のもつ多くの属性が無差別かつ無秩序に彼女の知覚世界に飛び込ん

でいることを想像させる。

2. 対象の認知のあり方はその属性と不可分の関係にある

ある対象をどのように認知するかは、その対象のもつ属性の何にどのように着目して関わるかということと密接に関係している。ひとつの対象がまったく中立的に（いわゆる客観的に）、いかなる文脈においてもまったく同じ意味を持つということはありません。

われわれはこのことを普段ほとんど意識することなく、日々の生活を営んでいる。このような心の働きは、暗黙のうちに遂行されているが、このことこそわれわれが住む社会の文化の働きということもできる。生誕後、ある地域で他者とお互いに関わり合い、様々な影響を及ぼし合いながら、ともに生きている。生きていく知恵の基本となるものの多くは、言語機能の獲得以前の生後数年間に獲得されていくが、それはいつの間にか身体に記憶され、普段は意識されることもない。

3. 着目する対象の属性と文脈

以上のように考えてみると、ある対象や事象のもつ意味を子どもたちに教えるためには、われわれの通常の認知のあり方をそのまま子どもに押しつけるわけにはいかない。対象のどのような属性に関心を向けて関わっているか、このことにわれわれも気づくことが要求される。とりわけ世界に対して独特な関わり方をしている自閉症児に対象のもつ意味を教えるためには、彼らとその対象とどのように関わっているか、どのような属性に関心を向けているか、このことをわれわれはともに分かち合っていることが大前提になる。

実際にはA男の場合、われわれの対象の捉え方とどのように異なっているのでしょうか。具体的にみてみることにしよう。

治療開始直後のあるセッションで、A男はいはいしながら、MIUに置いてあった「パンチングドール（起きあがり小法師）」のそばに寄っていった。そばでみていた母親は相手をしようとしてそれを思わず手で何度か押して左右に揺らし

た。するとA男はひどく怒り、手でそれを押さえて「パンチングドール」の裏面をじっと眺めていた。そこには注意書きの文字とマークが記されていたが、A男はそれに見入っていたのである。

4. 母親と子どもの対象への関心のずれ

母親が「パンチングドール」を思わず手で押して揺らしたのは、極めて自然な振る舞いである。その玩具はまさにそのようにして遊ぶように作られているからである。通常、身の回りには制作者の意図が反映され、その物にどのように関わるかは暗黙のうちに規定されている。だから母親が行った振る舞いは至極当然のことであった。しかし、A男のその物への関わり方、着目の仕方は明らかに異なっていた。彼にとって、その時のそれは「パンチングドール」という玩具ではなく、記された文字やマークそのものだったといっようよい。このような親子のある対象に対する関心や興味の向け方がずれることは決して珍しいことではなく、ほとんどの場合このようなずれを日々蓄積しながら、日常生活が営まれている。

V. 愛着形成と情動的コミュニケーション

情動的コミュニケーションの世界では、子どもの情動と養育者のそれとお互いの中でハーモニーを奏するように共鳴し合うが、そのためには両者間の情動調律が良好であることが不可欠になる。まさに音楽の世界そのものである。このようなコミュニケーションが生まれるためには、子どもの愛着欲求を養育者がしっかり受け止め、愛着関係が成立することが不可欠である。自閉症児と養育者とのあいだで容易に情動的コミュニケーションが深まらないのは、自閉症児に認められる強い接近・回避動因的葛藤、すなわち養育者に対する愛着欲求をめぐる強い葛藤があるからである。愛着形成を目指す上で、このような葛藤をいかにして緩和していくか、このことが関係障害臨床での最優先課題のひとつとなっているのは、以上のような根拠に基づいている。情動（情緒）が認知（認識）といかに深く関連しているか、多少なりとも

推測できよう。

VI. 対象への関わり方の共有と認知のあり方

治療ではA男の愛着欲求の存在に母親がビデオ (MIUでは毎回両親に治療場面が記録されたビデオテープを渡し、自宅でみている) を観察して初めて気づくことができた。それ以来、A男の愛着行動は日増しに強まり、数ヵ月で、母子間の情動的コミュニケーションは非常に深まっていった。

早期介入のポイント

早期介入においては、われわれは、第1に、母親の不安や焦燥感を極力吸収しながら、子どもの行動の背後にどのような気持ちの動きがみられるか、すなわち行動がどのような気持ちによって生まれているのか、をひとつひとつ取り上げながら、子どもの警戒心を刺激しないように心がけていった。

4ヵ月後 愛着行動の顕在化

しばらくすると、A男の母親への愛着欲求が強まるとともに、愛着行動がはっきりと認められるようになった。しかし、いまだ警戒的であるがために、母親がつい積極的に関わろうとすると、そのような接近そのものが彼に再び回避的行動を誘発するのであった。

ビデオフィードバックを通して、A男がいかに母親を求めているかを幾度となく示していくと、次第に母親は自信を持ち始め、焦燥感も和らぎ、根気強く相手をする事ができるようになっていった。

5ヵ月後 抱かれることへの葛藤

自分から母親に甘えて抱かれたがるようになっていくが、しばらくは穏やかに抱かれることは困難で、抱かれている時に激しく身体を動かし、じっとしておれないようであった。身体の強い緊張に基づく反応ではないかと考えられた。

7ヵ月後 気持ちよくゆったりと抱かれる

その後2ヵ月経つと、母親に抱かれることに対する葛藤はほとんど和らぎ、気持ちよさそうに

長時間抱かれるようになった。われわれが様子をうかがうと、照れたような恥ずかしそうな表情さえみせている。

10ヵ月後 おもちゃへの好奇心が高まり、意欲的となる

A男が追っかけていたボールを取って、高く挙げてA男に取らせようとする、自分から意欲的にしばらく一所懸命取ろうとする。母親がうまく合わせてやると、母子間でボールを転がし合っていて楽しめるまでになった。

13ヵ月後 われわれの玩具の扱い方を取り入れられるようになる

われわれが玩具を扱うと、それを見ておそるおそる自分も同じように扱おうとするようになった。最初はこわごわとしていたが、次第に何度も繰り返す中で、面白くなっていく様子であった。

関心や意図を分かち合う

母親はA男が今日の前の対象にどのような関心を向けているか、容易に察知できるようになり、治療者が気づかないことに、すぐに応じるまでになった。このように母子間で対象への関心や意図を分かち合えるようになると、先ほどのパンチングドールを母親が遊びの中で左右に揺らしてみると、A男は興味深そうにしばらく見つめ、おもむろに自分でも恐る恐る手で押し始めた。面白かったのか、ついには、何度も繰り返すようになったのである。このような対象への関わり方の体験が日々学習され、その場での母親の語りかけや動きかけが子どもの認知の枠組みを形作っていくことになる。

VII. おわりに

自閉症にみられる言語認知障害の成り立ちを考える上で、言語認知発達過程における母子コミュニケーションの様相を緻密に観察することは、多くの示唆を与えてくれる。本稿では、具体例を取り上げながら、自閉症児の特異な知覚行動がわれわれの対象知覚と大きく異なることが、彼らの言語認知障害と深く関連していることを指摘すると

ともに、愛着形成（甘え）を基盤とした情動的コミュニケーションの形成によって、接近・回避動因的葛藤が緩和し、われわれと同じように対象を知覚し、関わる事が可能になっていくことを示した。

本稿は第12回世界精神医学会（横浜市，2002.08.29.）シンポジウムにて発表した英文草稿を一部加筆し和文にしたものである。

<索引用語：自閉症児，動因的葛藤，愛着，甘え，母子治療室>

文 献

- 1) 小林隆児：自閉症の関係障害臨床——母と子のあいだを治療する——。京都，ミネルヴァ書房，2000
- 2) Richer, J. M. : Avoidance behavior, attachment and motivational conflict. *Early Child Development and Care*, 96, 7-18, 1993

Motivational Conflict, Attachment “Amae” and Emotional Communication between Infants with Autistic Spectrum Disorders and Their Caregivers

Ryuji KOBAYASHI¹⁾, Hiromi KOBAYASHI²⁾, Kunimi FUNABA³⁾, Tomoko NAKAMA⁴⁾, Natsuko YAMAMOTO⁴⁾, Morihisa TAKARABE⁵⁾

1) *Tokai University School of Health Sciences*

2) *Chigasaki Rehabilitation Technical School*

3) *Post graduate School of Health Sciences, Tokai University*

4) *Okinawa International University*

To date, many researchers in Japan have been working on the assumption that the cause of autistic spectrum disorders is attributable to some disorder in the ability of the child. We have been working on the premise that the autistic spectrum disorders are brought about by some form of relationship disturbances in early infancy, and have been attempting to validate this hypothesis through early intervention. We have been examining the developmental process of affective communication in infants with autistic spectrum disorders. We postulated approach-avoidance motivational conflict (Richer, 1993) as the primary factor impeding development of affective communication, focusing therapeutic intervention on this perspective. As a result, attachment behavior was remarkably improved in the children. Through a clinical course of an example, the problem pertaining to the process of acquiring the function of language cognition is discussed. Starting with the concept that the meaning of any given object is not stipulated as a unique existence, but by context, it is pointed out that in order to relate the meaning of some object to a child, sharing with the child “which” attributes of the object the child should focus upon and “how” it should be dealt with are

indispensable. This is then followed by discussion of how this cannot be accomplished without deepening of affective communication upon the basis of attachment formation.

(Authors' abstract)

<Keywords: autism, motivational conflict, attachment, amae, Mother-Infant Unit>
